



競技に参加したのは第二次世界大戦で脊髄を負傷し入院していた兵士たちでした。その後、大会は毎年開催され1952年に、第1回国際ストーク・マンデビル競技大会へと成長します。

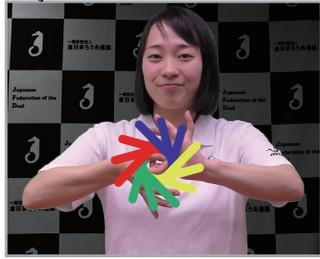
第9回大会は1969年オリンピッククローマ大会とともに開催され第1回パラリンピックとも呼ばれ、以後オリンピックイヤーに合わせて4年毎に開催されるようになります。聴覚障害者とはいうと、パラリンピックには参加せず、というか種目が無いのですが、独自にデフリンピックという競技会を開催しています。

デフリンピックの前身は、国際ろう者競技大会との名称で、なんとストーク・マンデビル大会から遡ること24年、1924年フランスで夏の大会が、1949年オーストラリアで冬の大会が始まっています。そして発足から52年後2001年、国際オリンピック委員会(IOC)の承認を得て、ろう者Deafとオリンピックを合わせた造語、デフリンピック (Deaflympics) となります。

しかし、なぜこのふたつは別々の大会に分かれているのか。一般財団法人全日本ろうあ連盟スポーツ委員会は次のように発表しています。

「デフリンピックの獨創性を追求するために、獨創性とは、コミュニケーション全てが国際手話によって行われ、競技はスタートの音や審判の声による合図を視覚的に工夫する以外オリンピックと同じ

同じルールで運営される点にあります。パラリンピックがリハビリテーション重視の考えで始まったのに対し、デフリンピックはろう者仲間での記録重視の考えで始まっています。現在は両方とも障害の存在を認めた上で競技における「卓越性」を追求する考えに転換しています」(一部省略)。



DEAFLYMPICS

また同組織のホームページでは「パラリンピックにろう者が参加できない状況が続いています」とも記載されています。近年ではパラリンピックの注目度は増しているもののデフリンピックはあまり一般に認知されていないような印象です。報道でも取り扱いは極端に小さい。ゆえに選手もパラリンピックに参加したいのではないかと気になってしまっています。

歴史を紐解くと、1989年国際パラリンピック委員会が正式に発足した時に国際ろう者スポーツ委員会は参加していたものの1995年にはパラ組織委員会から脱退しています。理由は3つ。

一つ目は、デフリンピックはろう者自身が運営主体を担っています。つまり聴覚障害者のことは聴覚障害者にしか理解できないという考え方が根強く残っていること。

二つ目は、競技を行うにあたり「手話通訳の負担は健聴者側であるべき」という考えがパラ組織委員会に理解されなかった。会議では、パラ組織委員会の発言を手話通訳者が居たとはいえタイムラグがあり会議につ

いていけず、健聴者に大会の主導権を握られてしまうという懸念がうまれた。三つ目は、デフアスリートは、パラアスリートと身体能力に溝がある、デフアスリートにはオリンピックメダリストが存在するなど。しかしながらチームスポーツ、特にバレーボールなどでゲーム中の声掛けが大変重要であ

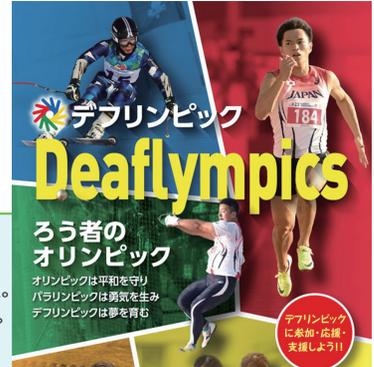
る競技では、健常者のチームにデフチームが勝利することは不可能とさえ言われています。しかしパラリンピック、デフリンピック、大会は分けなくても共に共存しスポーツ文化を発展させる事は出来ないのだろうか。そしてマイノリティを個性とみなす、そんなパラリンピックと獨創性を追求するデフリンピックの認知度は歴然とした差があることは否めません。

活躍の場が異なるアスリートは、互いの活躍をどのような気持ちで見ているのか。民族や国で言葉も文字も礼儀作法が異なっても、国際的なスポーツ競技は、どここの国でも同じルールで開催されています。世界共通ルールで人類がコミュニケーション出来るのはスポーツでありこれこそが人類の生み出した最良の文明ではないかと感じます。

地球環境を守っていくためには世界共通のルールが必要な時代であることは間違いないことであり、



デフリンピック夏季大会は、第1回1924年パリ大会に始まりほぼヨーロッパとアメリカで開催。アジア開催は、2009年台湾のみ。次は第24回2022年ブラジル大会。冬季大会は、第1回1949年ゼーフェルト大会。日本は2025年初開催を目指して誘致している。



Deaflympicsは平和を守り、パラリンピックは勇気を生み、Deaflympicsは夢を育む。デフリンピックに参加・応援・支援しよう!!

デフリンピック夏季大会は、第1回1924年パリ大会に始まりほぼヨーロッパとアメリカで開催。アジア開催は、2009年台湾のみ。次は第24回2022年ブラジル大会。冬季大会は、第1回1949年ゼーフェルト大会。日本は2025年初開催を目指して誘致している。

地球環境を守っていくためには世界共通のルールが必要な時代であることは間違いないことであり、

世界中のリーダーも理解しているでしょう。これからの世界をどのように考え、行動するのか、スポーツにヒントがあり、大いに活用出来るのではないかと感じます。KSCCの正式名称は、向陽スポーツ文化クラブ。この記事を書きながらこの名称、理念、ここで活動していることを誇りに感じました。 齋藤敬

サイエンスくらぶ 活動紹介

子どもたちに科学の魅力を知ってもらうための、サイエンスくらぶ。近々の活動を2つご紹介します。このくらぶから、将来のノーベル賞受賞者が誕生するかもしれません。10月16日(土)は、生物のカラダを造る設計図である、遺伝子の説明を実際にプロットコリーをすりつぶして、DNAがわかるように試薬を入れて色を付ける実験をしました。



そしてDNAのらせん構造を理解できるように、ビーズ製のストラップを作成して楽しみました。11月6日(土)は、竹とんぼを題材にして、プロペラの構造を理解して、良く飛ぶ竹とんぼを製作しました。

